

# 佑 啓

ゆうけい

発行 者  
社会福祉法人 佑啓会  
理事長 里見 吉英  
〒290-0265  
千葉県市原市今富  
1,110-1  
TEL 0436-36-7611  
FAX 0436-36-7612

## 判定が見失う

### 障害程度区分の目的

里見 吉英

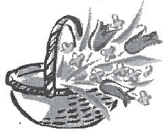
新法施行から1年が経過、障害程度区分は、やはり身体障害者には高く、知的・精神の方には低いという傾向は想像を超えて顕著に表れた。

介護度重視の判定ソフトでは、支援度は軽視される仕組みになっていて、ため当然といえ、当然と言え。また、認定調査員の資質というよりは、考え方、捉え方の違いで大きな差異が生じているのも事実である。更には市町村の姿勢にも影響され、当初、厚生労働省が目玉のひとつとした「全国一律の公正・公平な判断基準」とはかけ離れた状況に陥っている。

私どもの施設での典型的な事例を紹介させて頂く。仮にA氏としておこう。A氏は児童施設を退所後「生きんがための盗み」を繰り返して、刑務所を出たり入ったりしていた。しかし、最後に逮捕された時の公判で、検察側も彼

考慮に入れ、情状酌量を求める異例の措置がとられた。裁判官の温情により刑事罰を逃れたA氏は、県・市・警察の協力で福祉施設を探したのだが、受け入れを拒否された結局、市障害福祉課の車に先導されたバトカーで私どもの施設に移送されてきた。警戒心が強く、言葉のないA氏とコミュニケーションを図り信頼関係を築くことは容易ではなく随分と職員も悩んだ。

これまでの状況を不憫に思った職員が、勤務に関係なく関わってくれ、それから数年で落ち着いた日々を送るようになった。すると今度は健康診断で胃ガンと診断され、近くの総合病院で胃の全摘手術を受けることになった。たった一人の身内である兄に連絡をとると骨になつたら受け取りに行くとの返答。完全



看護であるはずの病院も付き添いが条件ということで、職員が交代で昼夜看病することになった。結果、予後は順調で退院してからも食事制限はいつの間にかなくなり、驚くほど早く元の生活に戻ることができた。それから数年が経ち自立支援法が出されると同時にケアプランは見直され、自活訓練事業(施設内半年・施設外半年)を経て、市のケースワーカーも同意の上で2ヶ月後のケアホームへの入居を目指した。そして今回、職員同席で調査を受けたが、A氏のような人の障害程度区分はいったいどのくらいになるのか、個人的には興味を持っていた。すると「区分1のためケアホームの入居は許可しない」という回答が市より届いた。彼の生活を支えるには目に見えない支援、形や時間に見えない支援があつたからこそ落ち着いた生活が維持されていたのは言うまでもない。その支援を今後も継続しなければ、暮らしが成り立たないというのをどうして理解してもらえないのか憤りを感じた。しかも、予定より1ヶ月半認定が遅れたために、施設入所はその時点で解除されており本人の生活は宙ぶらりんとなつてしまった。



その後担当者によるケア会議で①再審査請求を市に申し立てる②それでもダメなら県に不服申し立てをする③今の宙ぶらりんの生活をどうするのか市に問うという事になる。実施機関の市の見解は①については、本人の状態が3ヶ月経って変化があれば再審査する。②については検討したい。③については週って施設入所とする。ということだったが、不服申し立ての準備に入ることにした。ここでひとつ問題があるのは、彼に代わって誰が不服審査請求をするのか。後見人もいない、家族もいないという状態で誰が本人に代わって申請するのか、このことについては県の理解もあり、とりあえず施設が代わってするということで認めてくれた。もともと、本人と契約を結ぶという支援費制度自体私は反対であつた。契約書や重要事項説明書にルビをふつて、職員が一生懸命説明するものの理解して判を押した人は皆無に近いと思われる。家族の方からも「先生こんなことをしてて虚しくありませんか」と何度も皮肉っぽく言われた。障害者福祉に対する行政の責任が薄くなり、誰が彼らの生活を守るのか更に曖昧になつてしまった。このケースは極端な例だと思うが、入所施設で暮らしている人達には多少なかなれこれに近い状況が今後も起つてくるだろう。そこで以下の理由により、

出来るだけ早く認定調査を受けることを勧めたい。各市町村は、障害者計画を策定し数値目標を盛り込むことになっているが、実態把握をせずして、サービス提供の準備が出来るのだろうか。これは事業者にとっても同様である。現実が露わにならないければ、対応策がとれないことは自明の理である。徐々に認定を進め不安を解消する手だてを早期に取らなければならぬだろう。どんなサービスが必要になつてくるのか、本人や家族が望むサービスの利用が可能なのか、平成23年度になつてからは、上記のようなケースの解決を含め、混乱が予想される。現在でも「施設を出されてしまうのではないか」「施設を退所した後の生活が不安」という相談が多い。見直しの期間を有効に使うためにも、早期に障害程度区分の調査を受け、問題解決に向けた準備をすべきである。事業者自らで解決策が講じられることか、或いは改善を求める先は各市町村なのか、国レベルのことなのか。これを明確にしなければならぬ。

審査会もほとんどの市町村では、その構成を知的・身体・精神の専門家が1名ずつと、医師と社会福祉士等の5名で合議体が構成されているようだ。そもそも対象者の障害程度区分が適正かどうか審査する期間であるのに、殆どがこの人はいつ区分を上げようかという審査になっているという。最近の審査結果をみても下げた事例は殆ど無く、知的・精神に関しては言えりかなりの割合で数段階上がっているのが現状である。さらにその判断の仕方も市町村や各審査会でバラツキがある。判定自体のおかしさがここにも現れているといえよう。

そこで今、日本知的障害者福祉協会が検討しているように、3障害別々の判定基準を作り、調査員もそれぞれの専門家が当たる。審査会も現在のように、各専門家が合議体にひとりしかいない状況を改善し、判定基準と同様、それぞれの専門家集団で適正かどうか判断するというのが本来の姿ではないのか。

さらに区分認定の権限は市町村にあるのだから審査会での判定を参考にしながら、本人の生活状況(概況調査)を加味し最終的な決定をするというのが現状に一番あつた方法ではないか。

なにはともあれ、財政が中心の議論や施設や行政の為に議論ではなく本人を真ん中に置いた議論を進めたいものである。





# 清也と歩む

松田 豊子

「やっとなつとたり着いた、有り難うございます」

去年4月、入所確定の連絡を頂いた時の私の気持ちです。八幡学園と東村山福祉園のショートステイを経由して初めてふる里学舎を見学させていだいた時「働く」という事と生活の空間に長年求めていた所とびつたり合いました。若い女性職員がトイレ掃除をしていた姿・障害を持つ人の生活をどう支えるか説明を聞いて一瞬にしてふる里学舎に惚れ込んでしまいました。

松田清也19歳になりました。5歳までドイツで生活をし、5人家族の末っ子です。姉・兄とは10歳の年の差があります。地球上の全ての物は自分の物、自分中心に世の中が動いていると思っている清也は、重度の自閉症・知的障害、そして肥満と強度行動障害と異食と喜怒哀楽の激しさを持ちながらも言葉は全く持たない息子です。「こだわり」が次から次へと変化していくのですが良いこだわりが無く、しかも全てを私物化してしまうので、生活をしていくのは本当に大変です。

入所希望のきっかけは「飛び出し」でした。素早い動作ではなく買物引当がでけると私をぐいぐい引張りながら車道へ出て行くのです。「横断歩道を渡って」という声かけも聞く耳を持たず、今!と思っただけで行動してしまう危険と隣り合わせの生活が始まったからです。財布を持っていく私を連

れて行かなければ買物物はないという事は理解してあり、その頃の清也は人によって行動を変えていたのです、この危険を回避するのは今しかない、と、どしやぶりの涙で決意しました。

しかし、東京都の方から緊急性が低いと言われ親としてはずい分矛盾を感じてきました。3年前までは一時帰宅をしても恐ろしくて外出できませんでした。和田浦での生活が始まって少しづつ元の生活が出来るようになり、それでも私と息子の体力は反比例です。ヘルパーさんを依頼することにしました。その内1ヶ所は児童の見守りの経験が無くヘルパーさんとは、清也を通して自閉を学んでもらうつもりでお願いをしています。理解を深めながら甘やかす事なく一人の青年として付き合ってもらうことが一番の理想だと思っております。



清也の楽しみはやはり買物。スーパーでの野菜の買い出し、本の買いだめ、CDショップに寄り、コンビニで歯磨き粉を買って大満足。野菜が好きなのは良いのですが料理をさせてくれません。清也のあの大きなリユックにはこれら全てが入っています。ただ、本に関しては、選び方のセンスはとも良く感じますが、好きなページは食べる、嫌いなページは破るので本がやせ細っていきまます。食べ物はやめて見ながら楽しんでほしいものです。

葛飾北斎の大ファンで和服姿の人が大好きです。デパートに連れて行って突然清也がいなく

なつたと思つたら、呉服屋の前で幸せそうな顔をして立っていた事もあります。

地元の江東養護学校時代は、小学部の頃から畑泥棒で、畑出入り禁止令を出された頃もありました。校庭の柿の実はいつしか息子のお腹におさまり、困ったと言われながら大笑いされていた。和田浦で毎年栽培の話の聞くドキドキしてしまふ。何しろ生のまま食べてしまふカリユックに詰めるかどちらかです。

帰宅すると必ず2人で行く居酒屋があります。この3月なんとなんと清也が枝豆のさやを食べなくなったのです。なんて成長したことでしょう!5月の連休には、娘と友人が清也を河口湖方面に連れ出してきてくれた。イルカとふれ合いに成功。しかし、3分のみ。ゴム長ズボンがはずれ格闘となつたようです。

私の会社には4人の知的障害の人がいますが、彼らと清也の関係がユニークで今後が楽しみです。

服へのこだわり、思いを通す時の激しさ、丸ごとの息子を受け止めて下さる先生方に感謝の日々です。省エネタイプで動かすことが難しい清也ですが、自然の中でしつかり働き、ゆったり生活して欲しいと願っております。

(和田浦入所 松田清也母)

## 全体作業は6時ですよ!

楠元 洋海

ふる里学舎がある市原市は「産廃天国」の異名を持つほど

残土が運び込まれてくる。施設周辺も例外ではなく、隣の山の向こうまで残土が積み上げられてしまつた。日々、押し寄せてくる残土から利用者の安全を守るべく、理事長を始めとした幹部と施設周辺の地権者の方々と交渉が長年に亘り行われてきた経緯がある。

近年、交渉が前進したことにより、今や敷地の外周を歩くだけで一時間以上は掛かる広大な敷地となつた。総敷地面積は十万平方米以上。あまりピンと来ない数字だが広大な敷地から生まれる夢は大きく膨らむ。

「里山作りをしよう。重度の利用者の散策コースや果樹園を作ろう。ふる里カントリークラブも捨てがたいけど、一番見晴らしの良い処には高齢知的障害者の家をつくらう。」理事長が職員に語ってくれた将来構想に誰もが引き込まれたが、冷静に山を見上げると、見渡す限り竹藪に覆われている山が難攻不落の城にも思えた。

そこで、今年度4月より里山整備と果樹栽培を行う作業グループが立ち上がった。果樹栽培といつても定植を終えたばかりなため、活動の大半が竹を草刈機でなぎ倒しては、運び出すといった竹・竹・竹・竹・竹との戦いの毎日である。あまりにも竹と過ごすためか、毎晩、眠りにつく頃には目蓋の裏に竹藪の残像が焼きつき、竹の夢をみるようになった。

4月より担当職員5名と利用者さんで竹刈りを行ってきただが、草刈機を一日中稼働させても広大な敷地は一向に拓かれていかない。利用者さんからは、「この作業なにか意味あるの」と尋ねられ、先の見えない作業

に少々の不安を抱き始めた頃、東京・和田浦の職員の応援をもらい里山の竹刈りを全体作業で行うこととなつた。

「全体作業を行います。市原で里山の竹刈り、時間は6時より。ご協力をお願いします」

余談ではあるが、この連絡事項には注意をしなければいけない落とし穴がある。6時よりと記載されているが本当に6時からなのか?その時の状況や雰囲気から読み取らなければいけない。(幹部の職員が新人の頃、全体作業はいつもの時間からと聞かされていたが、通常の勤務時間に出動。しかし、いつもの時間とは早朝の事だったらしく、先輩職員から小言を言われた話は、全体作業の度に語り継がれる話でもある・・・)

迎えた当日の朝。ある程度の深読みと憶測、水面下での打合せにより午前5時20分頃には大半の職員が出動。それぞれの職員が我こそは、一番乗りと意気揚々と出動したのもつかの間、里見理事長の作業服姿を発見すると足早に作業場へ直行。(理事長は午前5時に出勤していたらしい。)

午前5時30分。総勢55名の職員が事前に決められた持ち場へと消え、新緑の山々からは草刈機のエンジン音が鳴り響く。用意した草刈機30台が無事に唸りあげる様子を見て5時前から草刈機を暖機していた担当が、ほっと胸を撫で下ろす。早朝の冷たい空気と青い空がともも心地よく、職員総出の作業に気分も高揚する。誰もが熱気に包まれ、手にする草刈機も心なしか軽い。ついでにメタボリツクの軽減もしてやろうと意気込む一部の職員。

時間の経過とともに瞬く間に切り拓かれていく竹藪ではあったが、対象的に失われていく体力・・・。若さを頼りに朝から張り切りすぎた新人職員。メタボリックな職員は日ごろの運動不足と負荷を掛け続ける自分の体重に後悔。体力の限界を超えた職員は思考能力が低下していく。しかし、朝からの反復運動により体は反射的に竹へと向かっていき誰もが作業終了後のビールだけを支えにしながら黙々と作業は進んでいく。

普段は東京・和田浦・市原と全く違った環境の中で仕事をしているが、ひとたび声が掛かると全体が結束する力はふる里学舎の魅力の一つだと自慢できよう。結束を固めるのに欠かせないのは、お待ちかねの慰労会。せつかく飲むのであれば本格的にと、しぜん工房前庭は、あつという間にビヤガーデンへと姿を変え、70リットルの生ビールも一夜にして空となった。

(ふる里学舎 支援員)

## 編集後記



ジメジメとした梅雨到来。嫌な季節ですが、和田浦では茄子やトマトやピーマンなど、夏野菜が小さな実をつけ、色付き始めています。夏が近づいてきた和田浦から 佐啓61号をお届けします。 高橋 未和